

# 明治初年に渡仏した日本のクジラ

- Uki Kuzira, *Kogia* des Mers du Japon -

山田 格 (新潟大・医学部)

Japanese Cetaceans Sent to France in Early Meiji Period.

by Tadasu K. Yamada

## 1. はじめに

明治初期の東京博物館(国立科学博物館の前身)が、フランスからの要請によってパリに送った*Kogia*の標本と、関連の話題を紹介する。

## 2. 問題の標本と関連記録

パリ自然史博物館は、自然史博物館として世界に名高い。その一部門、比較解剖学研究室 (*Anatomie comparée*)に、明治初年、文明開化真っ只中の日本から送られた*Kogia*の骨格標本がある (van Beneden & Gervais, 1880)。

●著者は1989年夏、その標本を閲覧する機会を得、以下の記録を確認した。

標本番号A-1197(Aは*Anatomie comparée*の略号)の台帳(以下台帳と省略)：

①日本近海の*Kogia* (*Kogia* des Mers du Japon)

②日本政府から送られた

③年度別番号1877-277

④参考文献 van Beneden & Gervais(1880)

年度別原簿(以下原簿と省略)の1877-277の記載：

⑤前後の275、278とともに日本政府から送られた

⑥日本側責任者は東京博物館館長Riokichi Yatabe氏

⑦同時に送られたのは *Ursus*, *Grampus*, *Sibbaldus*

⑧1877(明治10)年5月16日、パリに到着

⑨最近(1960年代)まで展示場に公開展示されていたという

⑩九十九里産の奴甕古矢刺(体長40尺, *Balaenoptera borealis*?)の墨絵が陳列されている。

●我が国でこの標本に関連しそうな記録を東京博物館年報(以下年報と省略)から列挙すると：

①1876(明治9)年11月、私人天文学士ジャンサンの要請で動物骨格をパリへ送った

②九十九里で捕獲したクジラ大小3種、クジラの図、鳥獣47種、昆虫104種他

③1876年12月(9日)東京開成学校五等教授矢田部良吉が東京博物館館長に就任

④贈り先は佛國巴里府天然物博覧場解剖學教士兼督學士ポール・ジェルヴェー

以上のデータをつきあわせてみると、双方に一致点が多いので日仏両国に残っている記録は同じ標本に関するものと考えてよさそうである。年報②にはクジラの種が

明示されていないが、原簿③に記載の *Kogia*, *Grampus*, *Sibbaldus* の3種と考えられる。また、⑩図中には、「この“ノソクジラ”は1876年9月に九十九里沖で漂流中に発見されたもので、品川沖まで曳航して骨格を採集しようとしたが強風のため流失した」と墨書があり、パリへ送るための骨格採集のため作業が行なわれたが、不首尾に終わったことを先方に伝える意図があったものと考えられる。

### 3. 三人の人物

上述の記録に登場する人物たちについて簡単に紹介しておく。

・矢田部良吉(1851~1898)

原簿⑥の *Directeur du Musée de Tokio*, M. Riokichi Yatabé は、年報③の東京博物館館長矢田部良吉と、姓名・肩書ともに一致するので同一人物としてよかろう。矢田部は静岡出身の植物学者で1869年に開成学校教授試補となり、外務省文書大礼使として渡米、コーネル (Cornell) 大学に学んだ。帰国後は東京大学教授、東京博物館長などを歴任した。日本に新しい植物学を導入し、植物分類学の基礎を確立した(山田他, 1960)。就任の日付からすると、標本採集に直接関与した可能性は低い。発送時には館長として連絡には関与したのだろう。

・Paul François-Louis Gervais(1816~1879)

台帳④の Paul Gervais, 年報④のポール・ジェルヴェーはパリ大学生物学教授でキュヴィエ (Cuvier) とブランヴィーユ (Blanville) の後継者として名高い。脊椎動物古生物学の創始者の一人で、台帳④に挙げられている文献、*Ostéographie des Cétacé* の共著者である。

・Pierre Jules César Janssen(1824~1907)

この標本との因果関係がわかりにくいのが年報①のジャンサンである。フランスの天文学者が、自然史標本の送付を日本に依頼するというのは少し不自然に思われる。お雇い外人として当時日本に滞在中で、単なる仲介役をはたした人物を想定して検索したが、それらしい記録には遭遇しなかった。しかし、ジャンサンという著名な天文学者がいた。彼は数学者・物理学者として研究生生活を始めたが、1868年には日食観測のためにインドに派遣された。ムドン (Meudon) 天文台の初代台長となり、太陽のプロミネンスの観測で知られている (Rice, 1960)。アカデミーなどの科学的団体の要職にあって、渉外連絡を分担していた可能性もあるかと思われるが、現時点では彼と日本の自然史標本の関連は不明である。

### 4. ウキクジラの名称

上述の原簿には送られた標本のラテン名と和名が並記されている。

1877-276	<u>Grampus</u>	(Koto-kuzira)
277	<u>Kogia</u>	(Ukikuzira)
278	( <u>Sibbaldus</u> ?) ( <u>Schlegeli</u> )?	(Nagazukuzira)

この Kogia が“ウキクジラ”と記載されているのは、東京博物館からの添付資料に従ったものと推定され、van Beneden & Gervais (1880) の“Uki-Kujira”の典拠であろう。Yamada (1954) は、当時日本のセトロジストには認知されていなかった“ウキクジラ”の名称の出自を考証し、安房では「其捕るものは槌鯨、梶鯨、浮鯨、孤渡鯨の四種とす」(竹中邦香, 1887) という記載をつきとめ、この名称が房州で用いられたものであろうと述べている。パリに現存する問題の標本が年報に記録されている標本と同一のものであれば、これらのクジラが九十九里で採集されたものであり、“ウキクジラ”が房州での名称であるとする Yamada (1954) の結論は当を得たものであったといえよう。

竹中の“孤渡鯨”を“コトクジラ”と読めば、1877-276 の“Koto-kuzira”との符合が気になる。原簿では Grampus とされているが、実見の機会がなかったので今後の検討がまたれる。

#### 謝辞

本稿に関する調査には国立科学博物館人類研究部の佐倉朔、溝口優司両氏と動物研究部の宮崎信之氏、千葉大学附属図書館椎名仙卓氏の懇切な協力を得た。東京大学理学部附属小石川植物園の邑田氏にはスライド撮影を引き受けて頂いた。この場を借りて感謝の意を表する。

#### 文献

- van Beneden, P. J. & Gervais, M. P. (1880) Ostéographie des cétacés vivants et fossiles. Bertrand, Paris.
- 国立科学博物館 (1977) 国立科学博物館百年史。国立科学博物館，東京。
- Rice, H. S. (1960) Janssen, Pierre Jules César. In: Shores L., et al. Eds. Collier's Encyclopedia 1960, Vol. 10., P. 603, P. F. Collier & Yamada, M. (1954) Some remarks on the Pygmy Sperm Whale, Kogia. Scientific Reports of The Whale Research Institute, 9, 37-58.
- 山田常雄他 (1960) 生物学辞典。岩波書店，東京。

付：

同時にパリ自然史博物館比較解剖学研究室所蔵の Mesoplodon, 下記の 3 種の骨格をスライドで紹介する。

M. bidens

M. densirostris

M. grayi